

# 日本語語彙の成立

## 「統治」をめぐる

田 淵 幸 親

### 目次

#### はじめに

##### すべおさむ

- 1 統治の原型
- 2 すぶ
- 3 おさむ
- 4 すべおさむ

##### 統治

- 1 統治の成立
- 2 伊東己代治
- 3 統治権
- 4 国体明徴

#### おわりに

本稿は、「日本語語彙の成立と変遷 『統治』をめぐる」と題する論文の前半部分であり、後半部分は「日本語語彙の変遷 『統治』の展開」として次号掲載予定である。そのためにあえて本稿のみの目次を掲げた。

### 要 旨

「統治」という語は日本社会ひいては日本思想のあり方を考察しようとするとき、そのてがかりを与えてくれる語である。本稿では、「統治」の和語である「すべおさむ」を「すぶ」と「おさむ」に分解し、それぞれの意味とそれらが合成されたばあいの意味をさぐり、「統治」という語の成立過程を描いた。

### キーワード

日本語語彙、日本語学、日本語史、統治、日本思想

#### はじめに

1993年1月20日、最高裁大法廷は、衆議院議員定数訴訟で、合憲の判断を下した。「憲法は、国会の両議院の議員を選挙する制度の仕組みの具体的決定を原則として国会の裁量にゆだねている」<sup>1)</sup>として、「国会の裁量権の行使」<sup>2)</sup>を認め、司法審査の及ばない領域のあることを鮮明に示した。高度に政治性を帯びた事柄にたいしては、判断は下せないとの意向を、最高裁が示

したのである。

高度に政治性を帯びた国家行為を「統治行為」というが、この「統治行為」にたいして司法は無力であるとの意思表示が「統治行為」という語のなかには存在する。「統治」と「行為」とを別個に観察してみると、「行為」という語にはなんら問題となるようなところは見受けられない。「統治」という語にこそ秘密が存在しているように見受けられる。「統治」という語に

は、触れてはならない意味領域がありそうである。極度に自己抑制的な態度を最高裁を頂点とする裁判所にとらしめている要因は、いったい何なのだろうか。この疑問を解くためには、「統治」という語のもつ呪縛力の謎を解明しなくてはなるまい。

すべおさむ<sup>3)</sup>

## 1 統治の原型

「統治」あるいは「統治権」という語は、地方行政レベルで用いられることはまずない。「佐世保市の統治機構」や「松浦市の統治形態」という使い方には不自然さがある。これはなにも市町村レベルだけについて不自然であるというのではなく、都道府県レベルにおいても不自然である。たとえば「長崎県の統治機構」「佐賀県の統治形態」なども、市町村レベルに感じたのと同様の不自然さを感じる。ところが、「わが国の統治機構」「韓国の統治機構」というような言い方には不自然さを感じない。どうも「統治」あるいは「統治権」という語は、中央ないし国家レベルで用いられるのが一般的であるようだ。「統治」の訳語として対になっているのが、governmentである。ところがgovernmentにおいて、local governmentという言い方に不自然さはない。「統治」という語がもつ意味にgovernmentとは異なった意味合いが潜んでいるようである。

「わが国の統治機構」とか「国権とは、国家権力または統治権を意味する」などという表現は、「統治」という語のもつ不思議な意味内容を暗黙裡にかぎ分けた用い方を前提として成り立っている。他方、「この町の統治は民主的に行われている」という表現は、「統治」という語のもつ不思議な意味内容に無頓着な用法であり、不自然な用法であるといえよう。そこで、いくつかの辞書で「統治」についての記述を拾ってみると、

・ すべおさめること。主権者が国土および

人民を支配すること。『広辞苑 第四版』

・ すべおさめること。主権者が国土・人民を支配し、治めること。『大辞林』

・ 主権者が国民・領土をすべおさめること。government<sup>4)</sup> 『日本語大辞典』

とある(下線部筆者)。これら3辞典に共通している説明語として「すべおさめること」が抽出される。「統治」とは「すべおさめること」だとしてよからう。「すべおさめる」とは「統べ治める」であり、「統治」の和語読みであることにも気付く。してみると、「統治とはすべおさめることである」という説明は、説明としての用をなさず、「統治とは統治である」といっているにすぎないのが、辞書の説明であるといえよう。修辞学というトートロジー tautology の陥穽にはまってしまっているのである。そうならざるをえないような内容と要因をもっているのが、「統治」という用語なのであるともいえる。さらにいえば、このような記述様式しかとりえなかったところに、「統治」という語のもつ魔力があるのかもしれない。その魔力の解明のためには、「統べ治める」を「統べ治む」にもどし、さらにこれを「統ぶ」+「治む」に分解し、そのおのおのについて検証・分析しなければなるまい。そうすることによって、無自覚・無批判に用いている「統治」という語の輪郭が明らかになってくるのである。

## 2 すぶ

「すぶ」の語義を辞書によって確かめてみると面白いことに気付く。「すぶ」には内容的に考えて、ふたつの漢字が「すぶ」と読まれていたようである。支配の意で「統ぶ」とし、とりまとめの意で「総ぶ」としていたと考えられる。ともかく「すぶ」はつぎのように説明されている。

・ 多くのものを一つにまとめる。統一する。治める。支配する。統轄する。『古

語大辞典』小学館

- ・個々のものを一つにする。別々のものをまとめる。とりつかねる。支配する。管轄する。『広辞苑 第二版補訂版』<sup>5)</sup>

この説明からみるかぎり、「すぶ」は個々別々のものをひとつにして束ねる意から派生し、「支配する」の意味を有してきたとみなされる。「つかねる(束ねる)」という記述からもそのことは読みとれよう。『広辞苑 第二版補訂版』で、「すぶ」の用例<sup>6)</sup>として示されているのは「欽明紀」からとられており、

- ・永く安寧を保ちて、海の西の蕃<sup>みかき</sup><sup>7)</sup>の国を統<sup>おさ</sup>べ領めて『広辞苑 第二版補訂版』

とある。『広辞苑 第四版』での「すぶ」の用例は、「地藏十輪經」からとられており、

- ・輪王と作りて四の洲渚を統<sup>な</sup>べきひとなり『広辞苑 第四版』

とある。いずれにしろ「支配する」の意は充分伝わってくる。ただ、「すぶ」は「すべおさむ」として用いられることが多く、単独で用いられることはあまりなかったし、支配者が特定されることもなかった。後にみるように、「統治」が天皇を主体行為者として特定するのと異なり、「すぶ」は古くはその主体者は支配者一般であり、もっといえば誰であってもよかったのである。「すぶ」あるいは「すべおさむ」が、その行為主体を特定し、天皇を含意するようになるのは、明治憲法成立後のことである。「すぶ」あるいは「すべおさむ」に、天皇を想起させようという意図はまだなかったとしていい。

### 3 おさむ

「おさむ」にはさまざまな漢字が当てられている。「治」「修」「納」「収」などがそれらの代表格であるが、先の用例が示すように、「領」

が当てられることもあるし、後に制定される明治憲法を考慮すれば、「理」もすこぶる重要である<sup>8)</sup>。他には、「御」「蔵」「馭」など、「おさむ」と訓まれる漢字は百を越える。当てられた漢字が多様であるということは、「おさむ」の意味も多義的であることを示している。ともかく辞書によれば、

- ・《治》混乱している事物を安定した状態にする。《修》事物を整った状態にする。《納・収》物事を落ち着けるべき所に落ち着ける。『広辞苑 第四版』

とあるところから推して、「安定した状態」「整った状態」「落ち着いた状態」にすることが「おさむ」の意味であろう。「おさむ」という行為の後に「おさめられた」状態が出現する。「おさむ」以前の状態は、「おさむ」行為後の状態の対極にあり、好ましい状態とは認識されていない。好ましい状態に対する了解を前提として成立しているのが「おさむ」という語である。

ここに示した「おさむ」の3つの意味範疇は、さらにいくつかの系 corollary に分かつことができる。それらは『広辞苑 第四版』によれば、つぎのように示されている。

- ・《治》乱れているものを平定する。病苦をしずめなおす。乱れた気持を落ち着ける。《修》乱れをただす。言動をととのえ正しくする。学問や技芸などを身につける。《納・収》ものをしまっておく。あるべき所にきちんと入れる。物や金銭などを受け入れる。没収する。金銭を払いこむ。外に向かつて働きかけていたものを収束する。物事を終える。埋葬する。『広辞苑 第四版』

「乱れているものを平定する」ということは、「乱れていない状態」をあるべき状態として措置し、その状態(本来あるべき状態)にもどすこ

とをいう。「病苦をしずめなおす」においても、病苦のない状態を、あるべき状態として指定している。「あるべき所にきちんと入れる」は、あるべき静態的秩序を事前に想定しておいて、その状態にもどすことを「おさむ」の意義としているのである。とすれば、「おさむ」の3つの範疇のうち2つは、文末を「もどす」とすることにより、より原義に近づく。「混乱している事物を安定した状態にもどす」「事物を整った状態にもどす」のようにすることにより、「おさむ」をいっそう理解しやすく説明することができよう。「あるべき静態的秩序」とは、混乱や変革ののちにゆっくりと受け入れられていくまったく新しい秩序をいうのではなく、これまでにあった伝統的秩序や日常に復帰することを意味している。「おさむ」には疑いようもなく善とされるイメージが潜んでいる。そのイメージがどんなものであるかを描いてみせたのが、古来以来の為政者たちだったのであろう。日本には革命の伝統は育たなかった。社会のかたちが言語を生みだし、その言語に拘束されて、社会がある形態を明確にしていくという相互作用が、言語と社会との間には存在することの証左となっているのが、「おさむ」かもしれない。

しかし、これだけではまだ「おさむ」を理解したことにはならない。「おさむ」はさらに積極的な意味ももっている。「病苦をしずめなおす」をてがかりとして考えてみると、このばあい、単に「病苦のない状態にもどす」だけでなく、「病苦のない状態を持続する」ことも含意していることは容易に理解できることである。善とされるイメージの保守もまたここでの課題となっている。「乱れた気持を落ち着ける」においても、「落ち着いた状態」が長期間つづくことを期待している。「乱れているものを平定する」では、「平定された状態」の長期にわたる持続を望ましい状態と考えていることを見抜くことができよう。

さらに「おさむ」の興味深いところは、ある所作の及ぼす方向が、一方向にのみ限定され

ず、その逆の方向をも意味するばあいがあるところにある。「物や金銭などを受け入れる」と「金銭を払いこむ」とが、おなじ「おさむ」によって表されているのである。政治的行為としての「おさむ」も、当然その二重性をア priori に負っている。政治の場面でこの二重性が機能するには、安定的政治状況が前提となろう。ともかく、「おさむ」のもつ二重性については、

- ・ 名詞「をさ(長)」の動詞化で、首長である「をさ」がその他の庶民を統一して、乱れを正し整える働きを表すのが原義。その原義から変動している物事を本然の状態に戻す意味も派生し、他方、物を収蔵する意味ともなり、転じては死者を埋葬する意をも表すに至った。収蔵とは反対の納入をも表すのは、物を本来あるべき位置にあらしめる意味では共通しているから、場面的な裏返しである。『古語大辞典』小学館

と説明されており、同一状況の「場面的な裏返し」が二重性の説明となっている。

「場面的な裏返し」を可能とするのは、「おさむ」を政治用語として限定したばあい、静態的な秩序あるいは安定的な政治状況が現存するという条件を満たしていなくてはならない。したがって、政治用語としての「おさむ」は混沌 chaos を著しくきらう。ということは、混沌のなかから、換言すればカオス<sup>カオス</sup>のもつエネルギーギッシュな状況のなかからあるべき社会秩序を造成していこうとするヨーロッパの革命 revolution 思想が根付きにくい風土を、日本はもっていたといえるかもしれない。混乱状態を自己の意志でもたらし、その混乱状態を自己のもつ政治的力量で収めていき、新しい社会秩序を造りだすというヨーロッパの政治風土は、今はともかくとして、日本には根付きにくかったのである。

#### 4 すべおさむ

「すぶ」と「おさむ」を合成して「すべおさむ」が成立するわけだが、また「すぶ」は単独で用いられることは少なく「すべおさむ」として用いられることが多かったのではあるが、この「すべおさむ」がいきなり「統治」となるわけではない。「すべおさむ」は、古代より近代にいたるまで、「おさむ」のもつ二重構造を内包する「すべおさむ」のままであり、一方向性しかもたない「統治」とは異なっていた。

政治的支配としての「おさむ」は「国家が人民<sup>9)</sup>を支配し、かつその状況を継続する」ことを意味しているが、被治者の視点で「おさむ」を用いることも多い。「税をおさむ」などは恰好の用法であるといえる。「人民がおさめた税をもってして国家がおさめる」という二重構造をもつのが「おさむ」であった。

同一の語が逆方向の意味をもつという興味深い性格を有している「おさむ」は、「すぶ」と合成されても二重の意味をもちつづける。和語としてひとつの語であるものが、まったく逆の方向性をもっているということは、日本の政治風土を特徴付けるひとつの性格を提示している。これはひとつの語にいくつもの意味が対応している多義語<sup>10)</sup>とは異なる。多義語とは、ひとつの語がいくつかに分かれし、意味の重層構造をもったものにすぎない。樹木にたとえるならば、地上部分の枝葉の生い茂った状態・構造を示す用語であるといえるが、地下部分までふくめた総体として表出したのが二重構造の性格をもつ「おさむ」であった。「おさむ」が「すべおさむ」という語のなかに取り込まれても、こうした性格を保持しつづけたのである。

個々ばらばらの人民に一定の領域内で平穩を保障するのが「すべおさむ」行為であると定義できるが、同時に平穩を保障された人民もその見返りとして「すべおさむ」こととなる。治者の被治者に対する行為を「統べ治む」とすれば、被治者の治者に対する行為は「総べ納む」あるいは「総べ理む」ということになる。漢字をあ

てることによって区別することは可能だが、元来和語としてはひとつの語であったもののなかに二重の意味を潜ませていたのが「すべおさむ」であった。

こうした「すべおさむ」の二重構造が崩れるのは、天皇制国家の支配原理が確立される明治憲法成立以降のことである。

### 統 治

#### 1 統治の成立

明治憲法の上諭には、「国家統治ノ大権ハ朕力之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ」とあるし、第1条では「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とされ、第4条では「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」というふうに、「統治」という語は用いられている(下線は筆者)。「統治」を「すべおさむ」とは訓まずに、「とうち」もしくは「とうぢ」と読むことが通例となっていた。意図してそう読むようにしたといえなくもないが、読み方の変化は内容の変化を表している。

憲法起草を主導したのは、明治期日本の演出家とも称すべき伊藤博文であった。1884年に設置された制度取調局の総裁として、伊藤は憲法起草の中心となった。しかもこの「制度取調局」は宮内省に属し、したがって聖域とされ、外界の影響から完全に隔離された<sup>11)</sup>のである。国民の目から隔絶されたところで憲法制定作業が行われたことは注目に値する。伝統的価値体系の時系列的中心でありながら、長い間の武士支配社会のなかで忘れ去られようとしていた天皇を国家の中心に据えるためにはそれなりの手続きが必要だった。日本をとりまく往時の国際環境が古来の天皇制の再現を許さなかったことも看過することはできないが、日本が近代国家としてのみてくれをそれなりに保持するために、近代ヨーロッパ諸国に比しても劣らないだけの国家的粉飾を必要としたのである。煩わしい民主的手続きを経ることなく、その意味で国家の



基本原則としての憲法制定作業を、他国の干渉を避けるためではなく国民の干渉を避けるために、伊藤は秘密裏に遂行していった。こうした憲法制定作業の過程で、「統治」という語が案出されたのである<sup>12)</sup>。

「統治」はここにいたって、「すべおさむ」のもっていた二重構造を崩壊させ、治者の被治者に対する政治的行為のみをさす語となったのであるが、さらに注目すべきは、そうした「統治」行為の主体が天皇に限定されたことである。これまで「すべおさむ」においては一定領域を支配する治者と被治者の関係を両義性をもちつつ一般的に表現していたのが、「統治」を訓読せずに音読することにより、和語のもつ輪郭の不鮮明さを払拭し不可触領域に定立したのが「統治」という語であったといつてよからう。それは、「天皇統治」を鮮明に打ち出した明治国家の一断面をみごとに表現する語でもあった。

善し悪しは別として、ひとつの用語の選定と造出というきわめて能動的な国家のありようを示しているのが、「統治」という語を選び出した制度取調局の憲法制定作業であった。明治憲法が隔離された密室のなかでつくられたとしても、その時代のもつ生き生きとした政治風土は、その後の日本を考えると、確かに鮮やかな色彩を放っていたといえる。明治期日本というのは、その意味で、動き、生きていた時代なのである。天皇制支配体制を内実ともに確立しようとして（そうした行為は今となれば批判すべき対象ではあるが）、さまざまな人の知恵や想像力が縦横無尽にかきたてられた時代でもあった。とはいえ、国家を演出する側と国家のなかで一定の役割を演じさせられる側とでは、意識や考え方にかなりの隔たりがあった。国権と民権の対立や国賦人権論と天賦人権論の対立などがそれである。そうした対立は国家・社会レベルにとどまらず、個人の内面においても存在した。中江兆民の「恩賜的民権」と「恢復的民権」の相克はそのひとつの例にすぎない。

## 2 伊東己代治

ここで明治憲法成立に大きな役割を果たした人物であり、制度取調局の一員でもあった伊東己代治の考え方を少しなぞってみよう。伊東は伊藤博文の恩顧を受け、伊藤の各国憲法調査のための洋行に随行し、帰国後伊藤の憲法起草を助けた。さらに、東京日日新聞の社長、枢密顧問官を歴任し、1927年の金融恐慌のさい若槻内閣を崩壊させたりもした人物である。政治の裏舞台で隠然たる力をもちつづけた人物でもあった。ことに金融恐慌期の暗躍は、立憲政友会と三井財閥を助ける結果となり、日本の中国侵略への道を開いたことは記憶しておいてもいい。

伊東己代治の訳出した伊藤博文の『憲法義解』の訳書 *Commentaries on the Constitution of the Empire of Japan*, 1906 では、「統治」を reign over and govern と訳出し、「統治権」は the rights of sovereignty としている。「統治」が reign over and govern と訳されたことは、伊東が「統治」という語のもつ意味内容をきわめて正確に理解していたことを意味する。「すべ」かつ「おさむ」ことの意を表現しようとして、「すべ」を reign over とし、「おさむ」を govern としたのである。さらに、「すべ」を reign とせず reign over としたことは、伊藤の意を受けて、伊東は日本全土にいきわたるべき天皇の政治的行為をイメージしたと考えられる。reign over する天皇が govern するのであるから、天皇のもつ権能は絶対的なものとなる。イギリス市民革命において、君主の地位が「王は君臨すれども統治せず King reigns but does not govern」とされるようになったことと比較すれば、天皇の地位がいかに絶大なものであったかが分かるし、こうした方向がヨーロッパ諸国のとった政治的方向性とはかなり異なっていることも了解しうる。それは伊藤博文の枢密院憲法制定会議における演説（1888年6月18日）によっても確かめることができる。

我国に在て機軸とすべきは独り皇室<sup>13)</sup> あ

るのみ。是を以て此憲法草案に於ては専ら意を此点に用ひ、君権を尊重して成るべく之を束縛せざらん事を勉めたり。或は君権甚だ強大なるときは濫用の虞なきにあらずと云ふものあり。一応其理なきに非ずと雖も、若し果して之あるときは宰相其責に任ずべし。或は其他濫用を防ぐの道なきにあらず。徒に濫用を恐れて君権の区域を狭縮せんとするが如きは、道理なきの説と云はざるべからず。乃ち此草案に於ては君権を機軸とし偏に之を毀損せざらんことを期し、敢て彼の歐洲の主権分割の精神に拠らず、固より歐洲数国の制度に於て君権民権共同すると其揆を異にせり。是を起案の大綱とす。

明治以前の社会にあっては、天皇はたんに「すぶ」存在だった。換言すれば、reign するのみの存在であったといえる<sup>14)</sup>。これに対して、明治以降の天皇は、新しい支配のあり方として、一方向性のみをもつ「統治 reign over and govern」する主体であることを鼓舞する必要にせまられたのであった。君臨し支配する天皇の政治的行為を表す語として、和語「すべおさむ」の音読語「統治」はつくられた。各種の辞書で、「統治」の説明が「すべおさめること」とされているのは、その意味で、きわめて象徴的である。

### 3 統治権

では、the rights of sovereignty と伊東によって訳されている「統治権」に何らかの意味は見いだせないだろうか。伊東が用いた「統治権」が、ドイツ国法学の論客イエリネック Georg Jellinek (1851-1911) のいう Herrschergewalt だとすれば、国権 Staats gewalt や Souveränität からは区別されねばなるまい。イエリネックの理論を受けついだ美濃部達吉は、天皇機関説を展開するなかで、「統治権」を国家に帰属させ、主権（大権）を天皇に帰属させる。そのことに

より、できるだけドイツ国法学の理解に近い憲法解釈を試みようとしたのである。しかし、明治憲法は「主権」という語は用いずに、「大権」という語を前面に押し出してきた。これは美濃部の憲法解釈にとって恰好のものであった。内容はともかくも、複数の用語の存在が形式的にドイツ国法学の理論と合致したのである。そうして、「大権」という語を用いることによって、ドイツ国法学の「近代的」法理論を後ろ向きに越えようとした明治期日本国家の重臣たちの新制天皇制に賭ける思い入れが結実していったといえるのである。

とりあえず憲法制定によって、「統治」「統治権」の規定を固定化した伊藤は、政党を自ら率い、側面から天皇統治権の援護を試みた。天皇統治の制度的完成を意図するのである。立憲政友会綱領（1900年成立）の第1項はつぎのようであった。

余等同志は憲法を恪守し其条章に循由して統治権の施用を完からしむを以て国家の要務を挙げ以て各個の権利自由を保全せしむことを期す。

伊藤自らが、天皇の政治的行為を表す語として「統治」「統治権」を案出した側にながらも、いったん語として定着してしまうと、今度はそれに拘束されてしまう。そうした様子は、彼の率いる立憲政友会という政党を政治の主役とするのではなく、「統治権の施用を完からしむ」ための装置にすぎないものとして位置づけたことによくあらわれている。政治の主役としての政党政治の出現する余地はほとんどなかったといっている。自由民権運動<sup>15)</sup>のような政治的成熟をもたらす運動や風潮は、思いのほか急速に萎んでいかざるをえなかったのである。しよせん民権は、国権とよばれた天皇制力学のなかに解消してしまうよう運命付けられていたのかもしれない。

#### 4 国体明徴

こうした状況のなかで、憲法解釈の技法を駆使することにより、法律の留保の幅を少しではあるが拡大したのは、のちに天皇機関説とよばれるようになる美濃部達吉の学説であった。だが美濃部の学説も、「統治」のもつ呪縛力のまえでは無力だった。天皇機関説を排斥しようとした「国体明徴声明」(1935年8月3日)は、「統治」「大権」「統治権」という語をちりばめつぎのように断言する。

大日本帝国統治の大権は儼として天皇に存する事明なり若しも夫れ統治権が天皇に存せずして天皇は之を行使する為めの機関なりとなすが如きはこれ全く万邦無比なる我が国体の本義を誤るものなり

この声明だけでは美濃部学説批判は不十分として、再度声明書をだすこととなった。「国体明徴問題再声明」(1935年10月15日)ではつぎのような下りがある。

我国に於ける統治権の主体が天皇に存する事は我が国体の本義にして帝国臣民の絶対不動の信念なり

この声明では、「絶対不動の信念」などというきわめてヒステリックな文言で、天皇機関説を葬り去ろうとしたことが明白に読みとれる。そもそも「絶対」とか「非常に」などという語は感情レベルの語であって、なんら客観性はもちえないとするのが通常の認識であるにかかわらず、あえてそうした低レベルの語を用いて威嚇しようとするのは、一貫した思想性も認識もないばかりに、それを隠蔽しようとして用いるものである。政治的にも精神的にも未熟であればあるほど、発する言葉は威勢がよくなり、批判を許さなくなる。これ以降、「統治」「統治権」さらには「大権」という語のまえでは、良心はほぼ完全に窒息してしまう。石川啄木のいう

「時代閉塞」状況が出現するのである。

おわりに

こうした経験をふまえ、当然のことではあるが、現行憲法では主権と国権の語は用いられたが、「統治権」の語は用いられなかった。それは、「統治」という語のもつ呪縛力から解放されたいという意志の表れでもあった。しかし、「統治」という語のもつ呪縛力は消滅することはなかった。「統治行為論」として復活を果たすのである。

ともかくここで筆者が意図したことは、日本社会や日本思想のひとつのかたちを描くことにあるのであって、成沢光のいう「華々しくやがて空しい言語系統論」の流れにくみするものではないことだけは断っておく。

謝 辞

本稿は、国際観光学科共同研究「茶道・鎮信流の歴史的展開に関する基盤研究」(安部直樹、木村勝彦、嶋内麻佐子、田淵幸親)の成果の一部である。記して謝意を表するしだいである。

注

1) 1993年1月20日『朝日新聞』

2) 1993年1月20日『朝日新聞』

3) 「をさむ」と表記するのが正しいのだが、ここでは現代語(近代語)としての「統治」をとりあつかう関係上、現代語表記にならない「おさむ」と表記した。

なお本稿は、全面的に、成沢光『政治のことは意味の歴史をめぐる』(未来社、1984)に依拠している。『政治のことは』の著者・成沢光の立論と研究方法は緻密にして正鵠を射ており、他の追隨を許さない。その『政治のことは』に依拠し、いくつかの私見を試みたのが本稿であり、その意味で、筆者自身がどれだけ本書を読みこなし消化しえたか、もしくは誤読し未消化であるかがあからさまになっている。本書にたいする依存があまりに全面的であるため、いちいちの注は付さないことにした。何につけ依存度合いがあまりに



- 全面的であればあるほど、かえって寡黙とならざるをえないものである。
- 4) 統治の訳語として government があるが、government は文脈によりさまざまに訳しわけられる語である。govern の原義にまで遡っての考察は、前掲『政治のことば』に詳しい。
- 5) 『広辞苑 第四版』の記述は、『広辞苑 第三版』の記述と同様に『広辞苑 第二版補訂版』の記述のいくつかを削除している。本稿をなすにあたって、手がかりとなる記述があるのは『広辞苑 第二版補訂版』の方なので、ここではそれを用いた。
- 6) この用例は『広辞苑 第三版』および『広辞苑 第四版』では除かれている。
- 7) 「蕃の国」を「みかきのくに」と訓ませているが、これを「となりのくに」のこととすれば、「となりのくに」にたいして「蕃」の字をあてたことの意味が読みとれる。「文化的に劣位にあるものが軍事的あるいは政治的優位だけを主張するところに、『蕃国』は小国であり、自国は大国であるとの特殊な観念が生じてくる」という『政治のことば』(pp. 121-122.)での指摘は銘記しておく必要がある。
- 8) 「総理」もまた「<sup>すべ</sup>総<sup>おさ</sup>べ理む」と訓める。「理」については、田淵幸親「鎮信流の歴史的展開基盤 経世済民思想の展開」『長崎国際大学国際観光学科共同研究費研究成果報告書 茶道・鎮信流の歴史的展開基盤研究』長崎国際大学, pp. 92-93. を参照されたい。
- 9) 「人民」という語にはイデオロギー的な色彩がつきまとうが、ここではそうした意味合いでは用いていない。国民・市民・臣民・常民・民衆等、それらすべてを包摂する概念の総称として「人民」という語を用いているにすぎない。いかなる政治体制のもとでも、またいかなる時代のもとでも生きつづけなければならなかった人びとのことである。「民草」とか「雑民」とでもしたほうがぴったりするのだが、まだ座りのいい言葉ではないので、あえて「人民」という語を用いた。
- 10) 杉本つとむ・岩淵匡編著『日本語学辞典』(桜楓社, 1990)の説明でも、同一方向での多義性を解説しているにすぎない。ある語と他の語との関係性を「外的体系」とよび、ある語の多義性を「内的体系」とよぶ宮島の考え方(宮島達夫「意味の体系性」『日本語研究の方法』むぎ書房, 1986, p. 55.)は興味深いが、宮島論文も同一方向の多義性について言及しているにすぎない。
- 11) E. Herbert Norman, "Japan's Emergence as a Modern State Political and Economic Problems of the Meiji Period" Institute of Pacific Relations, New York, 1940. 邦訳『日本における近代国家の成立』時事通信社, 1947, p. 259.
- 12) 民間から提起された憲法試案については、家永三郎・松永昌三・江村栄一編『明治前期の憲法構想』福村出版, 1967. に詳しい。抵抗権規定をもつ試案もあった。「統治」という政治的行為の逆方向の行為が「抵抗」であることを考えれば、当時あって「抵抗権」規定がいかに貴重であったかがうかがえる。しかしこうした思想も、「統治」ということばが定着していくにしたがい、失われていく。ちなみに「抵抗権」規定の箇所は、つぎのとおりである。
- 政府恣ニ国憲ニ背キ擅ニ人民ノ自由權利ヲ残害シ建国ノ旨趣ヲ妨クルトキハ日本国民ハ之ヲ覆滅シテ新政府ヲ建設スルコトヲ得
- 植木枝盛『日本国々憲』72条
- 13) この演説では、「天皇」という語は用いずに、「皇室」という語を用いている。天皇自身が天皇制によって拘束されていくことを示しているのである。平面的中心が天皇であるだけでなく、天皇自身も過去の天皇により拘束されるという図式を示したのは故丸山真男(『現代政治の思想と行動』未来社)であった。丸山の指摘の鋭さをみることができる。
- 14) 武士支配下の日本にあっては、それさえもかなりおぼつかなかった。ときとして天皇側の反乱もあるにはあったが、江戸幕府崩壊まで、天皇の存在は「すぶ」存在でしかなかったといえる。「おさむ」主体は武士であった。
- 15) 民権が何を指していたのか、それぞれの論者によって異なっていたことも、この運動の終息に拍車をかけたと思える。民権が、福沢諭吉のいう「人権」「私権」を無条件に保障することを求めるための標語としてではなく、「政権」を奪取することを主眼とするようになれば、それはたんなる政争にすぎなくなる。「人権」「私権」は、今でいう基本的人権であり、「政権」とは参政権のことであるが、自由民権論者たちの「民権」は、この「政権」にウェイトをおいていたことをよく示している。「よしや武士(節)」の一節に、「よしやシビルはまだ不自由でも、ポリチカルさへ自由なら」とあることが、その証左である。